

如来の作願をたずぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまいて
大悲心をば成就せり (『正像末和讃』真宗聖典五〇三頁)

第15組 興隆寺住職

伊藤 秀

text by Shigeru Ito

苦悩の有情

昨年のお彼岸の入りでした。町から少し外れた工場で火災が発生し、悲しいことに作業中であった御門徒の三十代の息子さんが帰らぬ人となりました。

数日後、検死よりご遺体が自宅へ戻り、枕直しの勤行に伺いました。変わり果てた姿の息子さんの側で家族、親戚の皆が俯いていました。何とも重苦しい雰囲気の中、お勤めを始めようとした私の背中に、絞り出すようなお母さんの涙声突き刺さりました。「住職！人生って…思い通りにならないね！」その言葉になす術もなく、黙って頷くことしか出来ない私でした。

葬儀が終わり毎週中陰参りに伺いました。「しっかりしなきゃね。でも、出来ないんだ」と、起こった現実を受け止めることも解決も出来ない吐露されるお母さんの姿が痛々しかった。それでも私の勧めに応え、毎回一緒にお念仏を申し勤行をして下さいました。

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、
この世の 始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。

(『真宗聖典』八四二頁)

蓮如上人のお言葉の「はかなき」は「果(ハカ)無き」と言われます。(ハカは、仕上げようと予定した作業の目標量。それが手に入れられない、所期の結実のない意『広辞苑』) 私達が生きる現実、どんなに強い思いや願いを持って、必ず思い通りになるとは限らないということを教えています。

誰もが「幸せ」を願い求めますが、その「幸せ」とは一体何でしょうか。よく考えてみるとそれは、どこまでも「思い通りになる」ということなのでしょう。

う。だから「はかなき」現実と、自らの思いの乖離に直面するほど、いよいよそこに苦悩を感じず。そして「幸せ」を求めるが故、それを阻害する原因を苦悩とし、取り払おうと必死にもがいているのが私達人間であります。でも、自分ではそれをどうにも出来ない。そのはざままで、なおいっそう苦悩を持たざるを得ないものの有り様を仏教は「生老病死」の身であると教え、また宗祖は「いづれの行も及びがたき身」（『真宗聖典』六二七頁）と教えられます。

ある日のお参り後、お母さんからお内仏のお荘厳について尋ねられました。そのとき私は曾我量深師の「回向とは表現である」というお言葉を思い浮かべました。お内仏とそのお荘厳は南無阿弥陀仏の願心の表現でありました。それは無数の念仏者がその願心を、自らの仏法聴聞の生活の中に聞き拓いた讃嘆と懺悔の歴史と共にお渡し下された表現(かたち)でありました。そこに身を据え念仏申し、お勤めをすることは「今ここにその願心が届けられているよ。気付いて下さい」という促しを賜ることでした。

如来の作願をたずぬれば、苦悩の有情をすてずして、回向を首としたまいて、大 悲心をば成就せり
（『真宗聖典五〇三頁』）

宗祖は曇鸞大師のお言葉により、五念門一番最後の「回向」を如来に人間が回向する行でなく、如来が本願を建てられてまず第一に（首として）その功德を苦悩の有情に回向され大悲心を成就されたと和讃されます。

一切条件を付けず、どんな者であろうとも捨てない願心（大悲心）は光明・名号のはたらきとあらわされます。私達の「思い通りにしたい」と苦悩する道理への暗さを破り、「思い通りにならない」この身の事実に目覚めよと呼びかけて下さっています。その呼びかけに頷き、頭が下がってゆくことのみが、生老病死の身を生きる私に、今待たれていることでした。改めてお母さんの姿と先師のお言葉に思い知らされた気がしました。

今年は息子さんの一周忌が勤められました。お母さんは今もなお、苦悩の内におられます。共に念仏申していきたい。